

て

—強接続と弱接続—¹

村田 明

キーワード：動詞テ形 補文標識 強接続 弱接続

1. 目的

第2節で動詞テ形を補文標識の「て」とそうでない「て」に区別する。前者が補文を導いていることを柴谷（1978）に基づいて示す。

次の例文(1)に見られる動詞テ形と(2)に見られる動詞テ形は、前者が複文構造、後者が単文構造に現れているという違いがあるように思われる。

- (1) 義雄は今日に**来**てもらう。
- (2) 義雄はまだ**来**てない。

(1) に現れている動詞テ形の要素「て」は補文標識であると考え、次の(3)に見られる動詞テ形の要素「て」も、第2節の基準に照らせば、補文標識ということになる。

- (3) a. 先輩が会社を**創**って、義雄がその会社に入った。
- b. 先輩がホテルに**泊**まって、義雄が旅館に泊まった。
- c. 先輩が**死**んで、泣いた。

(3a) では連続行為が、(3b) では同時的行為が、(3c) では原因・理由事象が動詞テ形で表現されているように見える。しかし、本稿では、これらの細かい意味特徴は要素「て」が本来的に有しているのではないと考える。要素「て」には、テ形動詞とそれに後続する要素をつなぐ働きしかなく、今述べた細かい意味は複数の節それぞれが持つ命題内容が相互に働きあって出てくるものであると考える。その動詞テ形の接続要素としての働きが、要素「て」に、(1) と (3) では補文標識機能を、(2) では否

定要素「ない」との相互作用から完了的意味合いを与えている。

第3節で、Kubo(1992)に基づいて、動詞テ形の強接続と弱接続の対立を導入し、それに基づいて、(1)～(3)に見られる動詞テ形の特徴を論じる。(3)の太字のテ形は補文標識という点では(1)のテ形と同じ特徴を持つが、テ形の強接続と弱接続という点では、(1)、(2)に見られる動詞テ形が強接続で、(3)の太字で示されている弱接続動詞テ形と対立する。

2. 補文標識としての「て」

柴谷(1978)では、(1)は次の(4)と同様の埋め込み構造を有すると述べられている。

- (1) 義雄は今日子に来てもらう。
- (4) 義雄は今日子に来るように言った。

(4)の埋め込み文に、表面的には現れていない主語が存在することを、柴谷(1978)は尊敬語化の現象を使って証明している。²

- (5) a. 太郎は山田先生が歩いているのを見た。
- b. 太郎は山田先生がお歩きなっているのをみた。
- c. # 太郎は山田先生が歩いているのをご覧になった。³

尊敬語化は、主語が話者の尊敬に値する人であれば、その主語に対応する動詞に「お・・・になる」⁴が付加される文型である。(4)の文型に尊敬語化を適用すると(6)のようになる。

- (6) a. 義雄は先生に来るように言った。
- b. 義雄は先生にお越しになるように言った。
- c. # 義雄は先生に来るようにおっしゃった。

つまり、例文(4)で、「今日子」は主節動詞「言う」の間接目的語であり、表面的には「来る」の主語は表現されていないが、それがあると考えないと(6a)から(6b)の尊敬語化現象が説明できないということである。結局、(4)は(7)に示す複文構造を有しているということになる。⁵

- (7) [義雄は今日子に [pro 来るように] 言った]

(7)にある pro は主節要素「今日子」を指し示す発音されない代名詞要素で、ここで

は埋め込み節の主語の働きをしている。

柴谷 (1978) は、文型 (4) だけではなく文型 (1) に対しても、尊敬語化現象を使って、そこに埋め込み文があることを示している。

- (8) a. 義雄は先生に来てもらう。
b. 義雄は先生にお越しになってもらう。
c. # 義雄は先生に来ておもらいになる。
- (9) a. 先生は義雄に来てもらう。
b. # 先生は義雄にお越しになってもらう。
c. 先生は義雄に来ておもらいになる。⁶

(8)、(9) に見られる尊敬語化現象は、「義雄」が前者では主節主語、後者では埋め込み文主語であること、「先生」が前者では埋め込み文主語、後者では主節主語であることを示している。つまり、尊敬語化現象は文型 (1) が次に示す構造を有していることを証明している。

- (10) [義雄は今日に [pro 来て] もらう]

本稿では、接続要素「て」が補文標識として (10) に見られる埋め込み節を導入していると考えられる。

- (11) [義雄は今日に [cp[pro 来][c て]] もらう]

しかし、同じ接続要素「て」であっても、文型 (2) に現れている「て」は補文標識ではない。

- (12) a. 義雄は先生にまだ言っていない。
b. # 義雄は先生にまだおっしゃっていない。
c. # 義雄は先生にまだ言っておいででない。
- (13) a. 先生は義雄にまだ言っていない。
b. 先生は義雄にまだおっしゃっていない。
c. 先生は義雄にまだ言っておいででない。

尊敬語化テストは「言っていない」が同一主語を要求している複合述語であることを示している。つまり文型 (2)、(12a)、(13a) は、埋め込み文のない単文構造であると考えられる。

同様に尊敬語化テストを文型 (3) に適用すると、文型 (3) に現れている要素「て」はすべて補文標識であることがわかる。⁷

- (14) a. 先輩が会社を創って、義雄がその会社に入った。
 b. 先輩が会社をお創りになって、義雄がその会社に入った。
 c. # 先輩が会社を創って、義雄がその会社にお入りになった。
- (15) a. 先輩がホテルに泊まって、義雄が旅館に泊まった。
 b. 先輩がホテルにお泊りになって、義雄が旅館に泊まった。
 c. # 先輩がホテルに泊まって、義雄が旅館にお泊りになった。
- (16) a. 先輩が死んで、泣いた。
 b. 先輩がお亡くなりになって、泣いた。
 c. # 先輩が死んで、お泣きになった。

(14a)、(15a)、(16a) は、それぞれ、(17a,b,c) の文型をしていると思われる。

- (17) a. [[CP[先輩が会社を創っ][c て]]、義雄がその会社に入った]
 b. [[CP[先輩がホテルに泊まっ][c て]]、義雄が旅館に泊まった]
 c. [[CP[先輩が死ん][c で]]、泣いた]

3. 「て」の強接続と弱接続

(18) は (19a, b) 2つの意味を表すあいまいな文である (Kubo(1992)参照)。⁸

(18) 義雄は晩御飯を食べてきた。

- (19) a. 義雄は晩御飯を食べた。それで、空腹ではない。
 b. 義雄は晩御飯を食べてからやってきた。

(19a,b) の違いは、要素「て」がその後続要素との間に間をおけるかどうかの違い、言い換えると、要素「て」の接続力の違いに起因するものであると考える。(19a) は「て」の強接続によって得られる解釈で、(19b) は「て」の弱接続によって得られる解釈である。要素「て」に強接続、弱接続の2要因を設定する理由は、「て」と後続要素の間に間をおける可能性の違い以外に、次のような現象が考えられる (Kubo(1992)参照)。

i) 「て」と後続要素の間に別要素が割りこめるのは、弱接続の場合である。

(20) 義雄は晩御飯を食べて、町内会にきた。

ii) 弱接続の場合は、「て」を含む「て」に先行する句を後置することができるが、強接続では、それができない。

(21) 義雄はきた、晩御飯を食べて。

iii) 弱接続の場合は、「て」を含む「て」に先行する句を削除しても意味を成すが、強接続では、それが意味を成さない。

(22) 義雄はきた。

(20)、(21)、(22) は、(18) の弱接続「て」の場合の意味 (19b) と含意関係にあるか、同じ意味を表しているが、(18) の強接続が表す意味 (19a) とはかなり意味が異なっている。

動詞「て」形強接続と弱接続の診断特性、つまり前段落で述べた i)、ii)、iii)、と後続要素との間に間が置けるかどうかを、第1節で述べた文型 (1)、(2)、(3) に適用してみる。間が置けるかどうかに関しては、文型 (3) は元々読点で区切られている点から見ても、弱接続であることがわかる。

(1) 義雄は今日子に**来て**もらう。

(2) 義雄はまだ**来て**ない。

(3) a. 先輩が会社を**創って**、義雄がその会社に入った。

b. 先輩がホテルに**泊まって**、義雄が旅館に泊まった。

c. 先輩が**死んで**、泣いた。

(23) *義雄は今日子に**来て**、もらう。

(24) *義雄はまだ**来て**、ない。

(23)、(24) で示しているように、文型 (3) とは違って、文型 (1)、(2) の要素「て」と後続要素の間に読点を入れることはできない。

診断特性 i)

(25) *義雄は今日子に**来て**それからもらう。

(26) *義雄は**来て**まだない。

(27) a. 先輩が会社を**創って**、それから義雄がその会社に入った。

b. 先輩がホテルに**泊まって**、一方義雄が旅館に泊まった。

c. 先輩が**死んで**、我慢できずに泣いた。

(25)、(26)、(27) で示されているように、文型 (1)、(2) では要素「て」と後続要素の間に別要素を挿入できないが、文型 (3) ではそれが可能である。

診断特性 ii)

- (28) a. *義雄はもらう,今日子に**来て**。
 b. *義雄は今日子にもらう、**来て**。
- (29) a. *義雄はない、まだ**来て**。
 b. *義雄はまだない、**来て**。
- (30) a. 義雄がその会社に入った、先輩が会社を**創って**。
 b. 義雄が旅館に泊まった、先輩がホテルに**泊まって**。
 c. 泣いた、先輩が**死んで**。

(28)、(29)、(30) で示されているように、文型 (1)、(2) では要素「て」を含む句の後置はできないが、文型 (3) ではそれが可能である

診断特性 iii)

- (31) a. 義雄は今日子にもらう。
 b. 義雄はもらう。
- (32) a. 義雄はまだない。
 b. 義雄はない。
- (33) a. 義雄がその会社に入った。
 b. 義雄が旅館に泊まった。
 c. 泣いた。

(31)、(32) は (1)、(2) とは全く別内容の文で、その間に同意性や含意関係を読み取ることはできない。これは、文型 (1)、(2) にある要素「て」が、後続要素と強接続しており、その接続を切ると、異なる文になってしまうからであると考えられる。一方 (33) は (3) の内容の一部を表して、(3) にある要素「て」が後続要素と弱接続で結びついていることを示している。

4. 結論

動詞語幹に付加して、それを後続表現につなぐ働きをする要素「て」について、まず、それが補文標識として機能しているかどうかを調べた。その結果、要素「て」は補文標識であるかどうかで2分できた。しかし、補文標識であるかどうかという文型による観点を離れると、要素「て」は、その接続機能という観点から分類されるべき特徴を有していることが見えてくる。この接続機能の特徴にしたがって、要素「て」を強接続の「て」と弱接続の「て」に分類した。補文標識として機能している要素「て」の中にも、強接続・弱接続という観点から見ると、補文標識として機能していない要素「て」と同類をなしているものがあることが見えてくることを示した。

注

¹ 査読者、田口茂樹氏に感謝する。その指摘によって、多くの不明な点、不正確な点を改善できた。それでも残っている問題点は、もちろん、すべて筆者の責任である。

² 複文構造を示す証拠として、i)の再帰要素がよく使われる。

i) 義雄_iは今日子_jに自分_{*ij}の家から来てもらう。

本稿では、複文構造証拠提示を尊敬語化だけに限ることによって、議論展開の簡略化を目指す。

尊敬語化の詳しい定義も、議論を簡略にするために、省略する。詳しくは柴谷(1978)参照。

³ # は、意図された内容では、その文は許容されないことを表す。

⁴ 「お・・・になる」は尊敬語化の一般形で、動詞によってはその動詞独特の尊敬語のあるものが存在する。

⁵ (7)の埋め込み文が制御文かどうかは論じない。したがって、ここでの空範疇要素を pro で表しているのは便宜的なものである。

⁶ 尊敬語化現象の使用域は個人差が大きく、「来ておもらいになる」という表現は筆者自身使わないものである。しかしながら、理解可能な表現であるとも言えるのではないだろうか。

⁷ さまざまな文脈に現れる動詞テ形の要素「て」が、尊敬語化現象だけで補文標識であるかどうかを判断できるわけではない。例文(3)の要素「て」がどのような接続機能を果たしているかも詳しく調べる必要がある。それらの問題をすべて棚上げにして、(3)にある様々な要素「て」が補文標識として文の前半部と後半部をつないでいると考えられるとしたら、どのような考察ができるかを追求していく。補文標識の定義特性をどのようなものかと考えるかを含めて、厳密な意味での補文標識の身元証明研究は、今後の課題とする。

⁸ Kubo(1992)は(19a,b)の違いは、異なる文構造によるものであると主張しているが、本稿では文構造の検討は行わない。しかしながら、査読者から削除を許す弱接続と許さない強接続に対しi)に示す提案がなされたことを記しておく。

i) a. [vp pro [v[cp 食べて] きた]] (CPはVの補部、VP指定部に pro)

b. [vp [cp pro 食べて] [v きた]] (CPはVの指定部、CP内に pro)

参考文献

Kubo (1992) *Japanese Syntactic Structures and their Constructional Meaning* MIT Dissertations in Linguistics.

柴谷 (1978) 『日本語の分析』大修館書店

(信州大学 全学教育機構 准教授)

2014年2月24日受理 2014年2月28日採録決定